

大塚正建 民族人口資料 三三
昭和十五年四月十五日

結婚促進に関する資料

(四) 生物學的見地より觀たる婦人の結婚適齡期に関する諸説

厚生省 人口問題研究所

B50.4/
90
1-32

M93A05
23

目次

一 岩田正道氏

(泉橋病院産婦人科部長
東京帝國大學産婦人科講師
医学博士)

昭和十六年二月國民復生聯盟研究會講演

一頁

二 篠田 紘氏

(東北帝國大學教授
医学博士)

第四回人口問題全國協議會講演

五

三 棚水 實氏

(東京帝國大學産婦人科医学博士)

六

四 三谷 茂氏

(日本医科大学助教授
日本赤十字社産院囑託
医学博士)

第十三回人口問題同攻者會合講演

一〇

五 加束道隆及陳承訓兩氏

(東京警察病院)

三九回日本婦人科学会地方部會合同研究會研究

三

大 氷澤 恆氏 (東北帝國大學産婦人科)

三八回 日本婦人科学会總會目錄

七 人口問題研究所に於ける調査

一、吉田正道氏（泉橋病院 産婦人科部長 東京帝國大学産婦人科講師 医学博士）

昭和十六年二月國民優生聯盟研究会講演

氏は結婚適齡期を決定する爲の観点として次の箇條を挙げてゐる。

一、何才の初産が最も容易であり且母体の障害が少いか。

二、何才の初産が胎児の發育が最も良く且其後の生育が最も良いか。

三、何才の結婚が最も早く受胎するか。

四、何才の結婚が最も挙子数が多いか。

氏は之等の諸点に就き内科の文獻を渉獵して考察を試みる。

ライプシヒのセルハイム教授は二十才以前は分娩に対して最も良い下

地の時期なりと言ふ。其他諸家も之に就いて再検討を行ひ大多數は二

十才未満、中には二十才を少し越えた場合一番出産に適當なりと結論

す。十才を過ぎれば骨盤の發育は既に完成に近い。

老年の分娩は陣痛は多少弱いか其の代り軟産道の弾力性が良く抵抗が

少いので却つて出産は楽である。又、分娩所要時間が少く、手術分娩を

必要とする事か少い。又産に依る裂傷も少く産褥熱も少い。

死産も若年出産者が多いと云ふ事實は見られない。

松浦海三博士（浜田病院）の研究によれば十八才、十九才頃々分娩の所要時間を最も少い。早期破水、会陰及び子宮口裂傷は十九才最も少く、以後年令を増すと共に其の頻度を増す。

又、分娩の際に手術を要する率も十九才が最も少く年令と共に増加する。

以上の松浦氏の研究によれば十九才の出産が最も平易である。

何才の結婚が最も早く妊娠するかに就いては東北大学の米沢氏の発表を引用し東北婦人では十七才になれば成熟してゐると述べてゐる。（米沢氏の説は別に掲ぐ）

其他三谷氏の業績（別に掲ぐ）を引用し之等の文獻から考へて岩田氏は十八才乃至二十才を初産に最も適當な年令なりと結論してゐる。

岩田氏は又、若い女性が少く少く職業に従事し、晩婚になると共に女性機能及び月経の裏調を来すものか少くなく、従つて子宮發育不全或は卵巣

の機能障害に悩む婦人が増加するが、之等の程度は軽いものは特別の
治療を施さずとも結婚生活を営む事により發育不全が改善されるから、
従つて早く結婚する事により斯かる發育不全や月経変動の改善を得る意味
に於て早婚すべきなりと説いてゐる。

岩田氏は更に産婦人科医以外の医學者の説を引用してゐる。

(一) 金子準二氏説 (警視廳技師医博)

結婚適齡は精神能力、生殖能力、育兒能力の三者を觀察して決定すべ
きである。而して日本の状態總てを參照し、は二十五才乃至三十才、女
は二十才乃至二十五才を適令期なりと論ず。

(二) 高峯博士説 (労働科学研究所)

結婚適齡の問題は身体的、精神的の両方から觀察して決定すべきで
ある。女性は一四才一ヶ月で成熟期に入り男性は之よりも三歳遅れ、
又、女性に男性よりも早く老衰する。之等の点並に精神能力、環境等を
考慮に入れて、心身共に成熟な発達期に掛らんとする最初の数年を期す。

男子は二十四才乃至二十八才、女子は二十才乃至二十三才を適令とする
と説く。

(三) 安井博士説 (優生結婚相談所長)

男子は二十才を以て丁年とするのであるから早熟な女子は之より早い
時期を以て結婚適令と考へて良い。

(四) 八木博士説 (労働科学研究所)

日本婦人の心身共に成熟する時期は十八才なりと。

三 篠田 弘氏（東北帝國大學教授 医博）

第四回 人口問題全國改議會講演

氏は東北地方に於て施行した出産力調査に基き次の如く推論し、東北地方の女子の結婚年令は平均二十才三ヶ月で時々十五才乃至十六才で結婚するものも五、六%もある。一方東北地方の婦人の初経年令は一五、八ヶ月で全國平均よりも一ヶ月遅い。斯く初潮年令は遅いから一般に早婚の爲月経も未潮せぬ内に同棲する者がある。此の爲同棲から初妊期迄の期間が長く同棲の初の五、六ヶ月は妊娠率が東京より低い。一五才以下で同棲した者は最初一年間の妊娠率二二%、二年目二五%で才五年目以上で初めて妊娠する者は三五%もある。一六才で結婚した者は一年目の妊娠する者が三三%あり、一七才結婚者は四三%か一年目に妊娠する。一八才、一九才で結婚した者は一年目に半数以上が妊娠する。従つて一七才に達すれば大部分が成熟完成に近く一九才で完成することを意味する。故に東北地方に於て最も能率を上げるに適當な結婚年令は一七才

乃至一八才と思はれる。即ち月経来潮から約ニヶ年を過ぎた年か一般の結婚適齢なりと考へる。

三、榎本 實氏（東京帝國大学産婦人科 医博）

婦人の生殖能力に就て（昭和十六年五月金原商店発行）

氏は東大産婦人科外系患者及び養老院浴風園入園者中より資料を集め次の如く推論してゐる。

一、性生活に入つた時期が早いと遅いとして閉経期に相違を来すかどうかも調べた処殆ど差異を認められなかつた。従つて早婚する程生殖有効期間は長く得られる。

又、早く分娩を開始した者と遅い者との就き其の月経持続期間に差異ありや否やを檢したる、其の間に差異がなかつた。

三、初経年令の早い者は早く結婚して差支なし、又早く結婚すべきである。

三、妊娠回数も最も多い結婚年令は一六才乃至一八才である。

四、 α -表に見る如く早婚者は概して終産年令が若く、晩婚者は遅い。併し實際利用し得る有効生殖期間は矢張り早婚者の方が長い。即ち一六才乃至一八才結婚者は一八才乃至一六年間であるが、二八才乃至三〇才結婚者は九九年乃至八年間である。

五、初産年令と終産年令との間隔を測べた α -表の如く概して初産の早いもの程終産も早い。全出産期間の矢張り初産の早いもの程長い。故に生殖可能期間を出来る限り長く活用するには矢張り早く初産しなければならぬ。

(昭和十六年五月金原商店発行「婦人の生殖能力」より)

第一表

結婚年令と終産年令

結婚年令	例数	平均終産年令	有効生殖期間
16.0才以下	73	31.48才	15.48年以上
16.1 - 18.0	309	34.10	18.0 - 16.1
18.1 - 20.0	422	35.21	17.11 - 15.21
20.1 - 22.0	387	36.65	16.55 - 14.65
22.1 - 24.0	235	36.63	14.53 - 12.63
24.1 - 26.0	71	36.62	12.52 - 10.62
26.1 - 28.0	34	39.77	13.67 - 11.77
29.1 - 30.0	16	38.00	9.9 - 8.0
30.1才以上	14	38.78	8.68年以下

第二表

初産年令と終産年令及び平均出産期間

初産年令	例数	平均終産年令	平均出産期間
18才以下	109	33.74	15.74年以上
18.1-20.0	367	33.86	14.86
20.1-22.0	381	35.31	14.31
22.1-24.0	332	36.05	13.05
24.1-26.0	173	36.93	11.93
26.1-28.0	91	36.58	9.58
28.1-30.0	58	37.42	8.42
30.1才以上	54	37.51	7.51年以下
平均	和	平均	平均
22.41	1567	35.67	13.28

四、三、谷 茂氏（日本医科大学助教授 医学博士）

第三回人口問題司攻者会合講演

氏は何歳に於ける分娩が最も軽易なるか、又何才の母より生れたる胎児が質に於て最も良好なるかの二方面より婦人の結婚適齡期の考察を行つた。

和一の点に就てはオ三表に於ける分娩所用時間、出血量、損傷等から考へて一九才の分娩が最も軽易である。

オ二の点に就いては同表中の胎児の發育分娩時及分娩直後の胎児死亡率の多少から見ると二十三才が適當である。

故に多数の産児を求むるには早婚を可とするか胎児の質の方面からすれば二十三才頃を以て最も可とする。

第三表 初產婦年齡別分娩難易表

年齡	死產率 (分娩數對%)	新產兒死亡率 (分娩數對%)	鉗子率 (%)	新生兒 體重平均	分娩 時間	分娩 時間
一七	八七〇	一	八六九	二六五〇	一四時一五分	一〇九
一八	一五九	六三五	三一八	二七六七	一〇	一三二
一九	七〇九	八五一	七〇九	二七五〇	九、四九	一〇五
二〇	四五一	四〇九	七三八	二八四二	一一、三九	一一一
二一	四一七	四〇一	九五九	二八四一	一一、四八	一一二
二二	四〇〇	三〇九	八一八	二八六一	一二、〇三	一一三
二三	三、五二	三、二四	九、一九	二八四二	一二、二五	一一七
二四	三、九四	三、一四	八、八一	二八一七	一二、二九	一二八
二五	四、五八	一、七九	九、七六	二八〇九	一一	一三八
二六	三、一五	五、二四	一、五四	二八三五	一一、五九	一三四
二七	五、四九	三、七六	一〇、六二	二八三八	一一、二四	一三六
二八	四、二二	一、一一	一三、二五	二八八二	一一、一七	一一二
二九	六、二五	四、六九	一五、六三	二九三三	一一、二二	一一〇
三〇	五、六九	九、九〇	一九、八〇	二九五〇	一一、四九	一一二
三一	四、一一	一〇、九六	二三、九九	二七五〇	一七、三六	一一三
三二	一、五〇	二、〇八	二二、九二	二七三三	一九	一一三
三三	九、三八	九、三八	二五、〇〇	二六〇〇	一五	一一六

三四才以後者略

五 加米道隆及陳承訓両氏 (東京警察病院)

三九回 日本婦人科学会地方部会合同研究会講演

妊娠、分娩、産褥等に就いて考察した結果二〇才を以て結婚適齡とする結論を得た。

六 米澤 盛氏 (東北帝國大学産婦人科)

三八回 日本婦人科学会總會目錄

東北地方に於ける出生力調査の基き結婚後一子妊娠率より見て満十才を適當とする結論した。即ち十七才で結婚した者から一年の妊娠する率は四三%、二年目は一三%、三年目以一%、四年目は六%、五年目は一%である。之は初婚を令を区別しない場合の総平均の妊娠率と殆ど一致する。故に東北婦人では十七才以下は身体が全く成熟

承ると考へられる。

七、人口問題研究所に於ける調査

本研究所に於ては神奈川縣在住の多産者に就き種々の調査を行つた。之に就いて多産婦人の初婚年令の觀察を行つたが、次に其の要点を述べる。

多産婦人の初婚年令は如表に見る如く最も若い者は一三才、最高年令二九才であるが、最多数は一八才で、二〇才、一九才、一七才の之に次ぎ、平均初婚年令は一九・五六才である。之と比較する爲に多産者の女同胞及男同胞の妻の初婚年令を如表に掲げたが、其の平均は二一・四三才であつて、多産婦人は其の同胞よりも平均一・七四年早く結婚してゐる事が判る。勿論、多産たるべき條件には初婚年令以外種々

の要図かあらうか、免以角多産たる爲の、一つの要件として満十七才乃
至二の才位で結婚する事か望ましい。

第五表 多産若男同胞の妻及女同胞の初婚年令

第四表 多産婦人初婚年令

初婚年令	百分率	初婚年令	百分率
10	0.12	13	1.28
11	0.05	14	0.93
12	0.17	15	4.17
13	0.46	16	8.66
14	0.40	17	11.59
15	1.50	18	18.70
16	3.62	19	14.99
17	5.70	20	15.77
18	8.86	21	7.73
19	11.91	22	7.73
20	13.52	23	2.94
21	12.20	24	2.47
22	12.00	25	0.93
23	10.13	26	0.56
24	7.65	27	0.77
25	4.89	28	0.15
26	2.30	29	0.77
27	1.27		
28	0.81		
29	0.23		
30	0.35		
31	0.12		
32	0.12		
33	0.17		
34	0.17		
35	0.06		
36	0.12		
37	0.06		
41	0.06		

